同志社の校歌を歌う効果あり

奨励	春名　康範〔はるな・やすのり〕
奨励者紹介	日本キリスト教団伊丹教会牧師

これが天地創造の由来である。

主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

（創世記　２章４―７節）

１、同志社の校歌の特徴

東京の伝統的な私立大学として慶応と早稲田を挙げ、京都の伝統的な私立大学として同志社と立命館を挙げ、校歌を比べるとそれぞれの大学の建学の精神が明らかになっているように思います。１９０８年（明治41年）に作られた校歌がCollege Songで英語というのも、１９３５年（昭和10年）に作られた大学歌の歌詞に「神」が出てくるのも同志社だけです。

１９３５年に作られた北原白秋作詞の大学歌では「蒼空に近く　神を思う瞳　挙（こぞ）れり同志社　一（いつ）の精神　伝えよ我が鐘　ひびけ高く　栄光新に　梢とそよがん　樹（う）えよ人を　耀け自由　我等　我等　地（つち）に生きん」と歌われています。「樹（う）えよ人を」というと、中国春秋時代の管仲の「一年の計は、穀を樹（う）るに如くは莫し、十年の計は、木を樹（う）うるに如くは莫し、終身の計は、人を樹（う）うるに如くは莫し」を思い出して、人生をかける仕事は教育だと同志社も歌っていると思う人が多いかもしれませんが、「人を植える」は旧約聖書出エジプト記15章17節で、神がエジプトで奴隷になっている人々を解放し自由の身にして約束の大地に移し植えると、書かれています。北原白秋が聖書の言葉を根拠にこの歌詞を作ったかどうかは分かりませんが、興味深い言葉です。作曲を担当した山田耕作はクリスチャンで、沢山の学校の校歌や童謡をタッグを組んで世に遺す親しい関係でしたから、彼を通じて聖書の言葉を学んでいたかも知れません。

２、我等、地（つち）に生きん

「地（つち）に生きん」は、同志社の校章が「土」を意味することから入れられた歌詞であると思います。この校章は、１８９３年（明治26年）に制定され、提案者は湯浅吉郎神学部教授でした。彼はオベリン大学とイエール大学でヘブライ語の勉強をして古代オリエントの歴史に深い憧憬があり、アッシリア文字で「土」とか「国」を意味する三角形を３つ集めたムツウを提案しました。この校章を提案した思いを調べようとしましたが、記録は見つかりませんでした。

私は、湯浅吉郎がヘブライ語で創世記２章４―７節を読んだ時に神様が「土」から人間を造られたと書かれていることに感動して校章のヒントにした可能性もあるに違いないと思いました。私も同志社で初めてヘブライ語で「人間」アダムは、神様によって「土」アダマーから造られ、土を耕して（cultivateして）生きる者とされたを読んで感動しました。

「地（つち）に生きん」とは、人間は必ず死ぬ有限な者であり、壊れやすく傷つきやすい弱い者であるが、神様の聖霊を受けて生きるものとされているのだから、神様が「良し」とされた美しく整えられた世界・大地に生かされていることを喜んで、人のこと他の生物のことも考えて大地を管理することを期待されており、そういう人間を育てる大学にしたいという願いがあったのではないでしょうか。

３、土を育てる

私は、青森で無農薬リンゴを作った木村秋則さんの映画を観て以来、自分も無農薬の農業をしたいと願っていました。そして、昨年、隣の土地を買い、果樹園と畑を作りました。しかし、１年目でカラスが柿の実を青いうちから食べに来るし、リンゴの実も小さいうちからカラスが食べるので、ネットを張ってカラスを排除しました。すると、スズメなどの鳥が来なくなり、果樹園に虫が湧いて、リンゴの木にカミキリムシの幼虫テッポウムシが入り、木が枯れるのかと思うほど弱りました。ドクダミを煎じて自然農薬を作ったり、針金を穴に入れて突いたり、数週間格闘しましたが効果なく、とうとう殺虫剤を使ってしまいました。土さえ育てば虫にも負けない木が育つと言われているのに、様々な微生物や虫や生き物が共生する土を作ることがどれ程難しいか理解出来ました。木村秋則さんも10年かかりました。「十年の計は木を樹（う）うるに如くは莫し」とはこのことだと学びました。「樹（う）えよ人を　耀け自由　我等　我等　地（つち）に生きん」と大学歌を歌い、全ての生き物が共に生きる世界、全ての人が差別や対立をなくして、共に生きる世界を造りたいと改めて思いました。

４、共に生きる世界を目指して

創世記は１章では「神は」と書かれているのに、２章４節では「主なる神が地と天を造られたとき」と書いています。これは神様のことを「神」エロヒームと呼ぶグループと「主」ヤーウェと呼ぶグループがいたのに、互いに自分たちの伝統や理解を絶対化せず、相手の呼び方を認めて繋ぎ合わせ「主なる神」ヤーウェ・エロヒームと呼んで、一致したことを示しています。自分の理解を絶対化せず、自分の伝統からも自由になって、共に生きる人間になる喜びを歌っています。

私たちの生きる現在の社会も、教会さえ、様々な摩擦や対立を抱えています。異なる個性や能力や伝統を持つ人々と共に生きる「共生社会を」と言いながら、テロや武力衝突が絶えません。私達は、同志社大学の校歌を誇りにして歌うたびに、自分はそのように生きているかと自問し、自分を耕し、礼拝を守り、同志社に学ぶ者、学んだ者として世界が一つになることを願って、生きていきましょう。One purposeは、一つの目的ですが、一つになる目的と理解して、和解と一致を形成していく働き人になりましょう。

２０２１年10月26日　同志社スピリット・ウィーク秋学期

今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録